て、両親の健在を祈ったものでした。親に急に安心させるのはよくない、親を安心させることはよいことではあるが、いっぺんに安心させ、喜ばせると親は張りがなくなってしまっていけないと思ったのでした。

たまたまそれから後です。日本とドイツとの戦争が始まり、軍隊が長崎港から船に乗って出て行くことになったのです。大ぜいの軍人が長崎に来ても普通の旅館ではもちろん足らないので、市内の各家に分宿することになり、私の家にも四名だったか泊まったのです。母は「だれも人の子、戦争に行ったら生きて帰って来るかどうかわからない」といって、わが子が出征するように思われ、真心を込めてもてなしました。夜具をはじめ、何から何まで至れり尽くせりで、徹夜を続け準備をととのえたのでした。

いよいよ兵隊が来ることになり、夕方迄に着くとのことだったので、夕食の準備をして待っていたのですが、なかなか来ない、真夏のことでしたので折角準備したご馳走が腐る心配があるのです。今のような冷蔵庫などなかったころですから腐らないようにしなければならず心配したのです。予定が遅れて夜の十二時頃だったと思います。ようやく軍隊が長崎に来たのです。まだ各家に分かれてしまわないうち、町の角に着いたとき、私は母の手を引いてそれを見に行ったものでした。それから、それぞれみなわかれて私の家にも兵隊が来たのです。早速食事を出されるばかりでなく、明日の朝のこともあるので母はまた徹夜して遅くまで準備をしていたのでした。